

現代スポーツを考える — 歓喜の表現や祝福の方法について —

岡 部 修 一
Okabe Shuichi

1. はじめに

一流プロスポーツ選手は、類まれな体力、技能、運動感覚をもっている。常人の想像を絶するようなパフォーマンスによって、世の人々を魅了し驚嘆させる。そして彼らは激しい闘いの中、得点をあげた場面や勝利を決めた瞬間に、これ以上ないほど歓喜の表情を見せチームメイトや仲間たちから祝福を受ける。そういった歓喜の表現や祝福の方法は、雰囲気盛り上げるパフォーマンスのひとつであり、チームメイトだけでなくファンやサポーターに対して歓喜や感動の共感をもたらすアピールでもある。

しかし昨今、歓喜の表現や祝福の方法がどんどん過熱し、過激さばかりが目立つ傾向にあり、非常に見苦しく感じたり首を傾げるようなものも少なくない。たゆまぬ努力と節制を積み重ね、精神的に大きな重圧を感じる試合で得点をあげる、あるいは勝利を決めるなどすれば、もちろん最高の歓喜、至上の達成感が訪れるに違いない。有頂天になる気持ちもわからなくない。しかし、それが悪ふざけにしか見えないものや、相手に対する敬意が欠けたもの、負傷する危険性のあるものなどであってはならない。本研究ノートでは、プロスポーツにおける歓喜の表現や祝福の在り方とはどうあるべきか、考えてみたい。

2. サヨナラ本塁打の主力選手が骨折

プロスポーツ選手は、日々厳しいトレーニングを積み重ね、栄養管理を行うなどストイックな生活を送っている。現役時代は日常のすべてをスポーツに賭けるといっても過言ではない。そして良好なコンディションを維持するための体調管理、またケガや故障の防止には細心かつ最善の注意を払うはずである。ところがそのような努力と節制を一瞬の愚行で台なしにする事態が本年5月、アメリカ大リーグ野球（MLB）で発生した。

2010年5月29日カリフォルニア州アナハイムのエンジェルスタジアムオブアナハイムで行われたロサンジェルス・エンジェルス対シアトル・マリナーズ戦、1-1で迎えた延長10回裏に5番打者のケンドリー・モラレス選手がサヨナラ満塁本塁打を放った。センターオーバーの打球がスタンドインするや、ホームゲームのスタジアム全体が歓喜の渦に包まれた。大歓声を浴びながらダイヤモンドを一周してきたモラレス選手は、ホームインする際に高くジャンプした。チームメイトに取り囲まれ、もみくちゃにされる荒々しい祝福がしばらく続いた後、歓喜の輪は次第に様相を変えた。グラウンドに仰向けに横たわったまま起き上がれないモラレス選手を心配そうに見つめる選手たち。やがて担架で運び出されたモラレス選手はそのまま病院へ直行した。診断は左足下腿部骨折、治療には手術が必要で全治数カ月、今シーズン中の復帰は絶望的というもので、まさに最悪の状況である。

映像で見る限り、ホームプレート付近にはヒーロー祝福のため、チームメイト十数人が密集して待ち構えていた。陸上競技の三段跳びのようなステップを踏み、最後の一步を高くジャンプしたモラレス選手の姿は集団の中に消えてしまい、どのような状況で骨折したかは定かではない。ただモラレス選手は着地する右足でなく、ジャンプで踏み切った左足を骨折していることから、自ら着地に失敗したというより、何らかの外的要因を受けたものと推察できる。映像ではモラレス選手のジャンプと同時に何人かの選手が彼めがけてジャンプしており、おそらくは宙に浮いた状態での接触によってバランスを崩し、不幸な事態が起こったと考えられる。

私自身は学生時代から現役選手15年、指導者として15年余りバレーボールに携わってきた。バレーボールでは選手同士がネットの近接距離でジャンプした際、他の選手の足に乗る、あるいはバランスを崩して不規則な着地になって捻挫や骨折をするというケースが多い。したがって至近距離で同時に複数の人間がジャンプすることには、ある種の怖さを持っている。そんなバレーボール経験から考えれば、十数人が密集した輪の中に、しかも何人もが自分に飛びかかってくるような状況で、ジャンプして飛び込むなどは、ケガが怖くてとてもできない。

モラレス選手はこの骨折によりDL（故障者リスト）に入った。ここまでの51試合で打率2割9分、11本塁打、39打点をマークしている打線の中核を失ったことは、この5年間でアメリカンリーグ西地区優勝4回を誇るエンジェルスにとって痛すぎる離脱である。

3. 過熱するセレモニー

殊勲の一打を放った選手をチームメイトが取り囲み、手荒く祝福する光景は、もはやMLBの風物詩と化している。ファンもその大騒ぎぶりを期待して待ち望み、楽しげに眺めている。

そして大リーグ同様、日本のプロ野球（NPB）でもサヨナラ勝ちの殊勲選手をチームメイトが取り囲んでもみくちやにし叩く、蹴る、ユニフォームを脱がす、ペットボトルの液体をかける等の荒々しい祝福が常態化している。

時代とともに過激になる祝福の手荒さについて、その危険性が憂慮される機会はほとんどなかった。幸か不幸か、これまで手荒い祝福でケガを負った事例、とりわけ今回のモラレス選手のような重傷を負うような事例が発生しなかったからである。かつて1989年9月25日のオリックス・ブルーウェーブ対ダイエーホークス戦で、3回裏に本塁打を放った門田博光選手をチームメイトのブーマー・ウェルズ選手がホームで出迎えた際、ハイタッチを強くやり過ぎて門田選手の右腕を脱臼させてしまった事例があった。ただこれは、現在のような手荒い祝福というよりも身長200cm体重100kgの巨漢ブーマー選手の腕力が単に強すぎた不可抗力と思える。

プロ野球に限らず、他のスポーツでも仲間による祝福でケガを負った例がある。

胴上げは集団での祝福として代表的なものであるが、日本のプロゴルフ界において胴上げで選手が落下しケガを負う事故が頻発した。

2009年12月の日韓対抗戦「京楽日韓女子ゴルフ」で、日本チームに勝って喜びに沸いた韓国チームは、表彰式後にキャプテン李知姫選手を胴上げた。足が高く上がり過ぎ頭の方へ重心がかかった李選手の身体を女子選手たちの腕力では受け止められず、李選手は地面に落下、腰を強打して救急車で病院へ搬送された。また2008年には「マスターズGCレディス」に優勝した大山志保選手が、胴上げされて落下し痛めていた肘を強打する事故が起きている。幸い二人とも大事には至らず、今シーズンも日本ツアーで活躍しているのは幸いである。

男子ゴルフでも2004年「ABCチャンピオンシップ」でツアー初優勝を遂げた井上信選手を仲間たちが胴上げた後、グリーン横の池に投げ込もうとした。池に向かって投げられた井上選手の身体は、池に届かず傾斜のついた芝生に落下して肋骨骨折のケガを負った。

胴上げによる事故は、一般社会でも起きている。放り上げる者たちが下でしっかり確実に支えないと落下事故につながり、骨折や脊髄損傷などの重傷、死亡に至ることもある。1990年以降日本全国では胴上げによる死亡事故が4件発生し、いずれも過失致死罪で送検されている。

落下事故に至る原因としては、「空中に放り投げる回数に誤解があった」「結婚式・送別会などの祝いの席で行われたため、放りあげる者が酒に酔っており、受け止められなかった」「悪ふざけの一環として、わざと落とした」などである。

胴上げには不幸な死亡事故も起きるほど危険性がある。心から優勝者を祝福する気持ちであっても、ひとたび事故が起きれば祝福の場は暗転する。さらにケガが原因で選手生命に影響を及ぼすようなことになれば、まさしく悲劇というほかはない。優勝者の胴上げは、よほど安全に配慮して行われなければならないが、歓喜に湧き立つ状況の中で冷静になるのは難しい。

プロ野球で劇的なサヨナラ勝ちを決めたヒーローに対して手荒い祝福が行われるのは、歓喜の極みという状況を考えれば、ある程度やむを得ない面はあろう。しかしモラレス選手のようにシーズンを棒に振る大ケガを負ってしまっては元も子もない。

モラレス選手が重傷を負った翌日、エンジェルスに再びサヨナラ本塁打が飛び出した。マリナーズとの試合で6対7と1点リードされた9回裏一死一、二塁、ハウィ・ケンドリック選手が逆転サヨナラの一打を右中間スタンドに打ち込んだのである。このときエンジェルスナインはホームベースに向かうケンドリック選手の走路を妨げぬよう離れて立ち、安全にホームインさせた後に彼と抱擁し合い、肩や背中をポンポンと軽く叩いて祝福を行った。

また前年の2009年9月7日、ミルウォーキーブリューワーズ対サンフランシスコ・ジャイアンツ戦の12回裏、ブリューワーズナインはサヨナラ本塁打を打ったプリンス・フィルダー選手に対し、体重の重い彼がジャンプしてホームを踏んだ瞬間、その衝撃で全員が一斉に地面へ倒れるというパフォーマンスを演じた。これは非常にウィットに富んだ、しかもチームの一体感を感じさせる演出で、ホームゲームの球場全体も大いに沸いたと思われる。このように、行き過ぎた手荒い祝福でケガを負うリスクを回避する方法はいくらでも考えられる。

日本のプロ野球ではサヨナラ勝ちの殊勲打を放った選手に対し、ユニフォームを脱がす、蹴飛ばす、踏みつけるなどの場面が頻繁に見受けられる。また今年もダグアウトに置かれた大きな円筒形ポリタンクの清涼飲料水を、ヒーローに頭からかけてズブ濡れにする行為が、西武ライオンズやヤクルトスワローズで行われた。かつてガッツポーズやハイタッチに始まった祝福のやり方は、より強い刺激を求める社会風潮の影響も受けてか、次第に過激で荒っぽい行為へと変貌し続けている。確かにプロスポーツ選手には、観客に歓喜と興奮を与え、楽しませ笑顔にすることが求められよう。しかし、蹴飛ばす、踏みつける、ユニフォームを脱がす、あるいはズブ濡れにするといった行為は、悪ふざけの高じた低俗なバラエティ番組のように感じてしまう。その笑いは心地よいというよりむしろ嘲笑である。日本では1970年前後に始まったある国民の人気バラエティ番組が、出演者に大量の水をかけてズブ濡れにしたり、全身を白い粉だらけにするといった派手で荒っぽい演出を行って視聴者に大きな笑いを提供した。そういった非日常的な行為は面白おかしいが、それがスポーツの場面にふさわしいかといえば疑問である。とくに手で叩くのはまだしも足で蹴るといった行為は常識的に考えれば極めて非礼で、人を愚弄する侮蔑的な振る舞いである。たとえ仲間内であろうと軽々に許されるとは思わない。にもかかわらず衆人環視、とりわけ子どもたちの眼前で、平気で行うプロ野球選手の見識を疑わざるを得ない。悪ふざけにしか見えない節操のない軽薄な行為は見苦しいし、特に子どもたちに決して良い影響を与えない。プロスポーツ選手たるもの観客や視聴者を楽しませ笑顔にさせる責務もあるが、それは断じて悪ふざけや愚弄による嘲笑ではない。むしろ常に視線と注目を浴びる存在であり

影響力が大きいことを強く自覚していなければならない。歓喜が最高潮に達し嬉しさの感情が弾ける場面でも、危険防止やハメを外し過ぎない節度ある振る舞いは絶対に必要である。スポーツにふさわしい歓喜と祝福のシーンを見たいものだ。

4. シャンパンファイトとビールかけ

最近、プロ野球やプロゴルフでヒーローや優勝者に水や飲料水をかけるシーンが目立っている。

これは、スポーツの表彰式や祝勝会などにおいて、優勝もしくは表彰台上に上った選手やチームがシャンパンもしくはそれに類するドリンク類をかけあって喜びを表現するシャンパンファイト（あるいはシャンパンシャワー）を真似たものと考えられる。

シャンパンファイトの起源は、フランス皇帝ナポレオン・ボナパルトが栓を抜いたシャンパンが勢い良く吹き上がる様子を気に入り、戦勝記念にシャンパンかけを行ったのが始まりといわれている。スポーツ界では1950年に大リーグのセントルイス・ブラウンズ（現：ボルチモア・オリオールズ）が、シーズン100敗をまぬがれた喜びの宴で行われたのが最初で、その後大リーグの優勝祝賀会では、シャンパンファイトが定番となった。

日本では1980年代半ば、当時人気を博していたモータースポーツF1の表彰式でシャンパンを勢いよく周囲にかける映像がくり返し放映されたことで認知されたようだ。1992年のアルベールビル冬季オリンピック大会のノルディック・コンバインド（スキー複合）団体に金メダルを獲得した荻原健司・河野孝典・三ヶ田礼一の3選手が表彰式でシャンパンファイトを行い、また1993年に開幕した日本プロサッカー（Jリーグ）では優勝祝賀会でシャンパンファイトが行われることが多い。

また近年、アメリカのプロアイスホッケーリーグ（NFL）やプロバスケットリーグ（NBA）では、リーグ優勝などの際に通称「ゲータレードシャワー」と呼ばれる、水分補給用のスポーツドリンクのタンクの中身を選手たちがヘッドコーチの頭上からぶちまけて優勝を祝う行為が広く行われている。ゲータレードとはアメリカで代名詞といえるほど普及しているスポーツドリンクの名称である。それまでコーラやコーヒーをスタッフや選手にかけて喜ぶ行為が散発的に行われていたが、現在ではゲータレードシャワーが一般的である。

一方、日本のプロ野球においては優勝祝賀会でのビールかけが定番となっている。これを始めたのは1959年の南海ホークスで、日本一祝勝会で大リーグのシャンパンファイトにヒントを得てのビールかけであった。ビールかけについては、その映像がテレビで全国に配信されることから、「商品を無駄にしている」「資源を浪費する無益な行為」「口に入るものを粗末に扱っている」など世論の批判も多い。また環境保護が叫ばれる現代社会では、ビールかけで発生する大量のビール混じりの汚水が、地域によっては排水の環境基準に抵触するケースもあるという。

このようにスポーツ界では、勝利後や祝賀会でシャンパン、ビール、スポーツドリンク、水などさまざまな液体をかける、あるいはかけ合うことで歓喜や祝福の気持ちを表す行為がしばしば行われる。飲み物を粗末にしている、バカ騒ぎがみっともないとの世間の一部の批判も、確かに正論ではあろう。しかし、一般人にとってはいささかハメを外し過ぎた行為に思えるが、彼らスポーツ選手と一般人とは違うのだ。辛く厳しいトレーニングとストイックな生活に耐え、想像を絶する重圧を撥ね退けた末に、優勝という栄冠を成し遂げたのである。歓喜と達成感に浸る至福の時、極限の開放感をもたらす行事としては、年に一度くらい大目に見てもよいのではないかと考える。ただしそれは「ビールかけ」「シャンパンファイト」を行う祝賀会として用意された会場という限定条件でのことである。昨今のビールかけは、ホテルや球場の駐車場など広いスペースを確保できる場所に、防水シートを敷き詰めて周囲や環境への十分な配慮をした上で実施している。かつて昭和30年代ビールかけが行われ始めた頃、南海ホ

ークスが旅館の宴会場で予告なしにビールかけをやって畳をすべてダメにしてしまい、旅館から球団へ厳重な抗議と損害賠償を請求されたこともあったという。

優勝祝賀会という大きな節目での、環境や周囲にも配慮してのビールかけは容認してもよいと思うのであるが、ペナントレース中のサヨナラ勝ちで、水分補給用ポリタンクの中身をかけてズブ濡れにするような行為は、悪ふざけが過ぎる印象で非常に見苦しい。

5. サッカーのゴールパフォーマンス

プロサッカー界では洋の東西を問わず、ゴール後に歓喜の気持ちを表現するパフォーマンスをみせる。スポーツにおいてガッツポーズやチームメイトと抱き合うなどは普通にみられる歓喜を表す行為であるが、サッカーのゴールパフォーマンスは、それとはまったく異質のものである。踊りやパントマイムのような動き、前方宙返りや腕立て前方転回、後方宙返りなどアクロバティックな技が披露されたりする。かつてはユニフォームを脱ぎ捨てたり、コーナーフラッグを抜いてのパフォーマンスなどもみられたが、現在それらはイエローカード（反則や悪質行為に対する警告）の対象となるため行われなくなった。

最近では集団でのゴールパフォーマンスが流行しており、スポーツやサッカーとは何の関係もない、例えば揺りかご、飛行機、魚釣りの真似などのジェスチャーが披露される。それはあらかじめ打ち合わせと練習を行っていたとしか思えないほど、息が合い鮮やかなものである。

それにしてもこのゴールパフォーマンス、試合中のボールデッド（時間が止まっている）間とはいえ、サッカーにそれほど思い入れのない人間にとっては極めて不可解な行為である。特に最近はやりの集団ゴールパフォーマンスには、かなり違和感と抵抗感がある。バレーボールでは試合中、ガッツポーズに類するようなもの以外にパフォーマンスは存在しない。そういった流儀からすれば、サッカーのゴールパフォーマンスについて、なぜそんなことをする必要があるのか、真面目に真摯に取り組んでいるといえるのか、悪ふざけではないのかという苦々しい思いにとらわれてしまう。

ところが、サポーターやサッカーフリーク（熱烈なファン）にとって、ゴールパフォーマンスは絶対的に必要不可欠なものであるらしい。ゴールを決めた自己主張のアピールと、サポーターや観客、視聴者の歓喜の感情を増幅させるという意味で、ゴールパフォーマンスは極めて重要であり、それを見るのがサッカー観戦の醍醐味であるとさえ考えているようである。

インターネット上で「ゴールパフォーマンス」を検索してみると、数多くの動画集がアップされ、「大好きだ」「愉快で笑える」「よく考えられて素晴らしい」「最高に楽しい」などのコメントが並んでいる。サポーターやサッカーフリークは、ゴールパフォーマンスに対し極めて好意的であり大きな期待を寄せて待ち望んでいるといえる。

日本にゴールパフォーマンスの概念を持ち込んだのは、三浦知良選手（現J2横浜FC所属）である。かつての日本サッカー界のスーパースターで、1990年代Jリーグ創設前後の時代にトップレベルの実力と絶大な人気を誇っており、三浦選手の日本サッカー界への貢献度は計りしれない。そしてゴールを決めた直後、細かいステップを踏みながら両手を回し、左手で股間を抑え右手で前方または天を指さし、ガッツポーズや投げキッスなどでフィニッシュする独特な踊りを披露した。日本にゴールパフォーマンスを定着させたのはこのカズダンスであり、1993年Jリーグ創設直後の頃、小中学生はこぞってゴール後に踊っていたという。

三浦選手の日本サッカー界に対する功績、貢献度が計り知れないほど大きいことは疑う余地がない。しかしゴールパフォーマンスが悪ふざけやおちゃらけにしか見えず、好きになれない立場の人間にとっては、スーパースター

で影響力の大きかった三浦選手がゴールパフォーマンスの概念を日本に持ち込んだことについては、どうしても評価できず功罪相半ばと感じてしまう。

しかしゴールパフォーマンスがサッカーシーンに必要な不可欠なものとするサポーターやサッカーフリークの人たちにとって三浦知良選手は、日本にゴールパフォーマンスを導入した偉大な先駆者と称えられるに違いない。これはバレーボールに関わってきた者にはわからない、サッカー独特の「価値感」「流儀」「しきたり」といったものであろう。

このことをサッカー専門の関係者にたずねてみた。三十数年の間、選手、指導者、連盟役員として大学サッカーに携わり続け、輝かしい実績をもったある大学サッカー部総監督は、

「自分が蹴り込んでゴールをあげた時は、もう何というか体の奥底からゾクゾクするような興奮が湧き起こり、やったという気持ちをどうにかして表したい鮮烈な欲求にかられるものだ。」

現在のさまざまなゴールパフォーマンスについては

「何かをやりたい気持ちはわかるので、ゴールをあげた本人がわずかな時間に行うのは構わないと思う。しかし品性のないものや下劣なもの、そして集団で何の関係もない動きをするようなパフォーマンスは許されないだろう。」そして「遅延行為うんぬんよりも、相手チームに対する侮蔑的な雰囲気になるようなものは絶対だめだ。」と語った。

指導歴十数年の別な大学サッカー部監督は

「プロであれば一定の限度内でゴールパフォーマンスはありだと思いが、学生サッカーにはありえない。選手たちにはそんなことする暇があったら、もっと集中しろという。」と語った。

やはりサッカーにはサッカー独自の価値観と流儀があると感じた。厳格な指導者たちでさえ、魅せることも重要な要素のプロサッカーならば、ある程度のゴールパフォーマンスは容認できるということだ。ただ高校生以下も含めた学生サッカーでは、不文律ながらゴールパフォーマンスは認められていないようで、教育の一環としたサッカーには、ふさわしくないということに一致している。

6. 雄叫び、踊りは本能的パフォーマンス

古く戦国時代から戦いに勝てば勝ち鬨をあげ、また人は何がしか喜びがあったとき、雄叫びをあげる。また祭りというのは豊穰、豊漁もしくは豊猟への感謝あるいは祈願であり、古今東西を問わず人間は、何らかの節目で踊りなどのパフォーマンスを行ってきた。

現在、スポーツ界でよく知られているものは、日本体育大学の「エッサッサ」や、ラグビーオールブラックス（ニュージーランドナショナルチームの愛称）のハカ、英語名ウォークライ（War Cry）である。

前者は大きく前後に足を開いた中腰の構えから、両腕を前後に大きく交互に振り上げながら「エーサーサー」とかけ声をかけるもので、日体大HPによれば、月に向かって獅子が咆哮する様子を表現し、離合集散の美を追求したものであり、日体大学生や卒業生の精神的土壌とされるものとある。集団で一条乱れぬ統一感で演じられると、実に荘厳で迫力あるパフォーマンスである。

後者は、試合前にオールブラックスの面々が揃って、中腰で手を叩き足を踏み鳴らして叫びながら行うパフォーマンスで、元々はニュージーランドの先住民族マオリの戦士が戦いに臨むにあたり、自らの力を誇示し相手を威嚇するために踊ったものである。現在では国賓を歓迎するために演じられることもあるフォーマルなパフォーマンスとなっている。

人間は折にふれ何かの節目には、踊りなどのパフォーマンスを演じてきた。そういった人間の根源的な風習や伝統を考えれば、サッカーのゴールパフォーマンスも、ゴールを成功させたことへの感謝、歓喜、絶頂の表現といえるのかもしれない。バレーボールの経験上からは理解の範疇を超えていても、パフォーマンスもある意味、サッカーの醍醐味のひとつと認め、遅延行為などのルール違反、また著しく品性を欠いたり、相手を侮辱するといったマナー違反にあたるもの以外は容認すべきことのようなのである。

しかし昨今のゴールパフォーマンスには、節度を欠くものや調子に乗り過ぎたものが見られる。

有頂天になった自己陶酔のような状態で、節度ある振る舞いをしろというのは難しいことに違いないが、サポーターやサッカーフリークなど一部の人間ばかりでなく、大多数の人間の理解と共感を得られるようなゴールパフォーマンスが望まれる。

7. まとめ

スポーツには歓喜の絶頂となるシーンが必ず訪れる。そのときヒーローやヒロインになった選手自身はどのように喜びを表現すべきか、また周囲の仲間たちはどのように祝福を行えばよいのであろうか。

さまざまなスポーツそれぞれに価値観や流儀、しきたりがあり、そういったパフォーマンスに対する考え方や感じ方も千差万別である。ただ興奮の極限にあるだけに、ともすれば過熱したり過激になる傾向がみられる。プロサッカーのゴールパフォーマンスは、選手個人のヒロイズムを満足させ、観ている者に期待と興奮をもって受け入れられるものである。ただ対戦相手に対する配慮や敬意を欠いたものであってはならない。またプロ野球のサヨナラ勝ちといった最高に盛り上がる場面で、祝福の手荒さが過激になり、ケガを負う危険性があるものや、低俗なバラエティ番組の如き悪ふざけのようなものは厳に慎むべきである。勝利至上主義の「勝てば官軍」という風潮下では、勝てば何をしても許されるという誤った概念がはびこりやすい。歓喜の絶頂にあり興奮の極みにある状況でも、冷静な節度ある振る舞い、行動をとれることこそが、一流のプロスポーツ選手ではないだろうか。

5月に起きたロサンゼルス・エンジェルス・モラレス選手の重傷の一件を受け、攻走守三拍子揃ったスタープレーヤーとして活躍してきたベテラン、デトロイト・タイガースのマグリオ・オールドネス選手は「オレはああいう祝福を楽しみとは思わない。いたるところからぶつけられて、皆が自分へ向かってジャンプしてくる。あの輪の中じゃ、祝福するよりも自分の身を守るの方が大事さ。ああいうのは好きじゃないよ」と語っている。

辛いトレーニングを重ね、懸命にコンディション調整を図るプロスポーツ選手は、まず体が資本である。そのうえで想像を絶する精神的重圧に耐えながら、長く厳しいシーズンで活躍することができた者だけが、至福の達成感を味わうことができ、高い報酬も得られるのだ。それが祝福の行為でケガを負ってしまったら、まさに本末転倒、元も子もない。ヒーローが担架に乗って出てくる場面など決してファンは望んでいない。

節度があって見苦しくなく、そしてファンを楽しませてくれるような祝福セレモニーの登場が待たれている。

8. 参考文献・資料

スポーツとは何か	玉木正之	講談社	1999
スポーツ文化を学ぶ人のために	井上 俊・亀山佳明	世界思想社	1999
スポーツ倫理の探求	近藤良享	大修館書店	2004
スポーツに内在する問題について	岡部修一	奈良文化女子短期大学紀要	2005
近代スポーツ文化とは何か	西山哲郎	世界思想社	2006
スポーツから気づく大切なこと	中山和義	実業之日本社	2008
スポーツに内在する問題について(4)	岡部修一	奈良文化女子短期大学紀要	2009